

13 世紀初期にイタリア人聖職者 Thomasin von Zerklære が ドイツ人騎士たちに説いた徳操 stæte — 「第二の書」による

尾野 照治

シュタウフェン時代の人生訓が包括的な内容を有する最初の詩として、一人のイタリア人によってドイツ語で著されたことは偶然とは言えない。道徳の深い考察と教えを、およそ 14700 行の「十の書」で著した Thomasin von Zerklære¹ は、Wolfger von Ellenbrechtskirchen の宮廷に仕える聖職者であった。Wolfger は Aquileia の総大司教を務め、ドイツ中世最大の抒情詩人 Walther von der Vogelweide の、絶大なる愛好者でありパトロンでもあった。Aquileia はドイツ帝国の南東のはずれに位置していたので、ドイツ人領主の支配のもとにイタリア人民衆が暮らしており、この地域で Thomasin はイタリア語とドイツ語を話し、ドイツの騎士制度にも通暁することになった²。

Thomasin は 1185 年頃の生まれで、家族は小都市貴族に属していた。上部イタリアのそれほど大きくない宮廷で、通常の学校教育ならびに宮廷教育を受けた。その宮廷で南仏プロヴァンスの宮廷文化と宮廷詩に出会い、自らの教訓的資質に従ってその宮廷詩のなかの Ensenbamen の詩に手を染めた。この詩の内容は、宮廷の人生訓と愛の教えである。ドイツ文芸からではなく南仏の詩から詩作を学び取った彼は、イタリア人である自分自身を「異国の客」と称して、その作品 "Der Wälsche Gast"³ の中で宮廷の人生訓について語っている。1209 年に、オットー 4 世の皇帝戴冠式に参列する総大司教に随行してローマに赴き、その後故郷に戻ると急いでこの作品を作り上げた。1215 年から 1216 年にかけて、10 ヶ月の間に毎月一章ずつ書き進め、全十章（第一の書から第十の書⁴）

を書き終えた。しかし、彼はこの作品を書き上げた後、私達の目の前からすっかり姿を消してしまった。

イタリア語を母語とし、南仏プロヴァンスの宮廷的教養を身に付けた聖職者 Thomasin は、ドイツ人騎士たちに道德の実践的な振る舞い方を教える教師でもある。作品では人としての徳操と悪徳を扱っているが、そのお手本としたのは論理的著作ではなく各種の説教だったので、厳密に体系化された倫理をそこに求めることはできない。キリスト教会がいかに俗人達を説得して世俗に背を向けさせようとしても、シュタウフェン時代においてはもはや不可能であることを見てとった彼は、世俗を一部容認する態度をとりながら、この世で神にも世俗にも満足してもらえる振る舞い方を目指した。教えを理解させるために、天国の報いと地獄の罰を絶えず示すのであるが、しかしそれは Memento mori の脅すがごとき口調ではない。彼が模範として掲げるのは、秩序のとれた生活ができる人である。それを実現するためには、もっとも重要な道德態度の一つである stæte⁵ に、特に重点を置かなければならぬ。

これから、Thomasin von Zerklære が著した "Der Wälsche Gast" の「第二の書⁶」を、さながら説明するごとく分かり易く邦訳する。様々な解釈上の問題があるためか、この重要な著作の現代ドイツ語訳は、まだドイツ本国でも刊行されていない。それゆえ、すでに現代ドイツ語訳のある他の著名作品と比べて、この作品を訳出する困難さは極めて大きいと言わざるを得ない。しかし、当時の思想を理解するためには、この著作に通暁することが極めて重要であると確信するがゆえに、敢えてここに邦訳を示す。

I. (1707～) 私は先の「第一の書」で、人は若いときに礼儀作法と宮廷作法を身につけるべき必要性を語った。それを怠る人は償いとして、年をとってから立派でいなければならぬ。そうしない人は、自分の人生をすべて台無しにし

てしまうから。そのような人は、生まれてこない方がずっと良かったであろうに。

dirre mînen gmeinen lêre / wil ich ervinden michels mêre / an den vür-
sten und an den herren: / von den schînt guot bild von verren⁷.

一般の人々に説くべき我が教えを、諸侯や君主を鏡にしてもっと
沢山見つけ出そう。遠方にいる彼らから、うってつけのお手本が
見えてくるので。

私が間違いを犯しても、それは私一個人に留まるが、しかし諸侯の罪はすべての人々に関わる。案内する者の目が狂っていると、私達皆を危うい方向へと導いていく。人の頭がいつもおかしいと、手足を正しく動かせない。樹木の根を傷つけると、その大枝も枯れる。奔流の水が汚れていれば、支流の水も同様に汚れる。それと同様のことを話そう。誰をも恐れてしまって何も遂行できず、統治能力もない君主が支配している国は、愚かな君主によって惑乱状態に置かれる。そのような国は、そこに住み続けたい人に、大きなダメージを与えるにちがいない。君主の怠惰が、哀れな領民にしばしば損害を与えるからだ。敢えて統治しようとししない君主は、自国の領民をすっかり愚か者にしてしまう。愚図な君主はつまらぬ輩を、自分に対して大胆に敵対させる。君主が敢えて命令しなければ、命令すべき力をすっかり弱める。海には必ず水があるように、くだらぬ人はくだらぬ振る舞いをするものだ。森には必ず動物がいるように、くだらぬ君主も当然ながらくだらぬお手本になる。私達は君主であるあなた方をお手本に、人が何をなすべきかを終日観察せざるを得ない。あなた方が立派に振る舞うなら、私達は大喜びでその立派な振る舞いに倣う。しかし、もしあなた方が不正を犯すなら、私達は何をお手本にすべきか分からず、夜が明けるま

ですっと迷い続ける。不正を犯せばあなた方は、私達から光を奪う夜になる。私達はあなた方をすっかりお手本にして、自分自身を振り返って見るべきだ。あなた方はさながら鏡、私達はそれに姿を写して見る女。鏡に凸凹があれば奇妙な姿に写って見える。あまりにチビに見えたりノッポに見えたり、あるいはひどくデブに見えたり痩せて見えたりする。君主たる者は、狭すぎたり広すぎたりしてはならず、短かすぎても長すぎても駄目である。君主は正義を守るために狭さをもたぬがよい。そうすれば道は広く平坦になる。君主なら当然持つべき名誉を捨ててはならぬ。足を踏み出しすぎて人の権利を蹂躪しないよう力をコントロールするために、広すぎるのを避けるべし。さりとて短かすぎるのも避けるべきだ。心がせかすままに急いではならぬから。君主は当然なすべきことを、不足なく行うべきである。長くなりすぎるのも避けるべきであり、立派に振る舞うことをぐずぐずすべきではない。さらに正義が要求する以上の振る舞いをしてはならぬ。鏡が然るべく澄みきっており、傷がなくて真んまるであれば、確かにあるがままの姿を写して見られる。君主も良きお手本となれるよう、心がすっかり澄んでいなければならぬ。誠実さの点でも苦楽によって心変わりせぬよう、完全無欠でいるべきだ。たとえこの世で何が起ころうとも、君主は徳操圈内から足を踏みはずしてはならぬ。徳操が変わることのないようにせよ。これこそ常に私が教えるところである。君主の徳操が邪な謀略に苦しめられていても、私は心の中でその君主を、高く掲げられる蠟燭の灯りだと思っている。蠟燭が時に消えることがあれば、蠟燭を下に降ろす（君主の首をすげ替える）方が良いであろう。灯りの消えた蠟燭を相変わらず燭台に立てたままにしておく人は、もし恥じる気があり恥ずべき事を恥じられるのなら、そのようなことを恥じて当然である。灯りの消えた蠟燭ならそれを投げ捨て、もとの燭台に火のついている蠟燭を立てるべきである。くだらぬ君主を蠟燭と同じようにすげ替えることができるのであれば、その君主を私ならさっさと捨てるで

あろう。人は徳操を得ようとする前に、まず是不徳をすっかり捨てよ。良い種を撒こうとする人は、その前に畑のガラクタを充分に取り除くべきだ。畑の中に石や茨があると、穀物はいとも簡単におし潰される。何よりもまず苦しい努力を、揺るがぬ心の獲得へと向けるがよい。そうすればきっと、他の徳操をもっとよく体得できよう。だがその傍に揺るがぬ心が寄り添っていなければ、他の徳操も無価値だ。心変わりを捨てようとするのでなければ、揺るがぬ心をもつことは誰にもできぬ。心変わりを捨てる人は、揺るがぬ心を体得することができる。それゆえに私は第一に、心変わりについて話さなければならない。橋を架け替えようとするなら、役に立たぬ古橋をすっかり打ち壊してから、そこに立派な新橋を架けるようにという話を、私はしばしば沢山聞いた。

wir suln der unstæte brükke / genzlichen lân ze rükke / und suln alrêste
mit getæte / sîn an guoten dingen stæte. / der unstæt der ist harte vil, /
der ich iu ein teil sagen wil⁸.

私達は心変わりという橋をすっかりかなぐり捨てた後に初めて、立派なことを心を変えずに実行すべきだ。心変わりの例は枚挙に暇がないが、その一部をこれからあなた方にお話ししよう。

II. (1837～) 心変わりとは一体何のことか。それは殿方らの屈辱であるのに、国中で思い違いをしている。心変わりは邪なことを変わることなく行う。立派なことを変わりなく行うようにと、心変わりに強制することは誰にもできない。それは自由身分ではなくて、常に不徳の完全な奴隷である。心変わりは老年でも若年でも不徳に従う。どんな不徳も心変わりから奉仕と助言を受ける。それはいつも、あらゆることをとても忙しく行っている。心変わりには、今日行うことが明日も良いことだとは思えない。それが何かを作ると、心変わりの

助言がすぐにそれを打ち壊す。それは四角なものをさっさと丸いものに変形するが、丸い形のままにしておくことはない。四つの角をもっている方が安定するから。望もうとしないものを望むというのが、これからもずっと心変わりが行うもっと良い楽しみ方だ。変えることを厭わしいと思ったことは一度もない。心変わりは小さなものを大きくしたり、大きなものを小さくしたりする。今走っているかと思えば、もうゆっくりと歩く。今昇っているかと思うと、もう降りてくる。今日出かけるかと思えば、明日には戻ってくる。今から山へ行くかと思えば、もう海へ。今日一人にいるかと思えば、明日には大勢を連れてくる。いま森へ行くかと思うと、もう町にいる。あっちへ行こうとこっちへ来ようと、心変わりには王手がかかる。どこにおいてもそれは、自分を狩り立てる衝動を心の中にもっているからだ。どこへでも行きたい所へ移動することはできるのだが、心変わりが自分の心から出て行くことは一日たりとてできない。(1875 ～) 子犬の尻尾に鈴を付けると、あっちへこっちへと走りまわりますが、外したいと思うものが自分の尻尾に付いていることに気づかない。心変わりしやすい人も同様で、何が邪魔をしているのか気づかないし知りえない。そのような人をあちこち追いかけていくものが、その人自身の中に隠れているということに気づきなさい。心変わりはとうてい消化できそうにない食事をたらふく試食する。その胃袋は多様で異常な食事によって麻痺しているからだ。心変わりの胃袋もまた移り気で、その食欲はすぐに失せる。朝に喜べるものが一日中続くことは決してないから。心変わりの食欲は、沢山の食事によって減退している。もっと沢山の食物を求めてガツガツする人は、心を一つのものに定めることがない。心変わりしないでおうとする人は、一つのものに集中せよ。一つのものに心を定めようとしない人は、一つのものを獲得する前に三つのものを捨てることになる。そのことが私達には、しばしば明らかになった。一意専心のできない人が何を手にいれたのかを見るがよい。世間を旅して回ろうとす

る人は、確かにあちらこちらで宿を得られるものの、しかしどこにおいても親しい関係は得られぬ。何にでも同じように気をそそられる人も同様で、多くのものを諦めることになる。

(1905 ～) 数多くの書物を蔵している司祭は、私の教えに従って一冊の書物に心を定めよ。なぜなら、一日で沢山の書物にすっかり目を通そうとしても、それらが意味するところをすべて理解することはできないからだ。書物から知識を得ようとする人は、著述内容の達意眼目を把握したら、それをしっかりと掴んで離さないようにせよ。家の前を余りにも足早に通り過ぎようとするれば、その戸口を通して家の中を充分に見ることはできぬ。途中で投げ出しても何かに役立つほど結構な振る舞いなんて、この世にはありえない。含蓄深い言葉に耳を傾ける人は、書物の門前にじっと立ち止まっていたはならぬ。書物が教えるところを根底から理解するまで、しかと心を定めてそれに没頭すべきである。雫はポタポタと落ちて岩を穿つのであって、力ずくでいっきに穿つことはない。立派な話に心を留めることのできない人は、それを無意味なものともみなす。しかし立派な話にしかと思いを致すことのできる人は、それに大きな喜びを見出す。

(1927 ～) 読んでいる書物を理解できない人は、しばしば長い時間を失う。しかし読書で立派な言葉を解せる人は、その日一日を無駄にすることは決してない。書物の内容を理解しようとする人は、立派な話を十分に思索するべきである。読んだ話を今日はたやすく打ち捨てることがあっても、明日になると心喜べるという話がある。一つのことに没頭する心の足を、立派なものの上にそっと踏みしめておかねばならぬ。しかし、そうこうしている間に足を怪我したら、歩くことは足にとってよくない。後にその足で歩きたいのなら、暫くの間じっと横になっていなければならぬ。一つに定めない食事は体のためにならぬ。病人が健康を取り戻したいなら、いつも食事をコロコロと変えてはならぬ。すぐ

に回復したいのなら、医師の診断に従うべきだ。あれこれ薬を試される病人は、しっかりと守られることがない。すべてのものに対して心変わりがあるてはならぬ。一つの薬で回復できるのに沢山の薬を試すなら、その人は実に愚かな人だ。試してはいけないものを試したと、しばしば望まない結果を招く。一つのことを手がけている人は、他のことに手をつける前に先ずはそれを片付けるべきだ。それこそ正しく素晴らしい振る舞いである。なぜなら、多くのことを一度に始める人は、終えたいことを終えることができないからだ。沢山のことを一度に考える人は思考力を弱める。思考力を分割すれば各々が小さくなるからだ。どこにでも関わりをもつ人は、どこにも関われない。私はずっと以前からそのことに気づいている。

(1965 ～) Swaz ist ganz, muoz sîn eine: / unstætekeit diu ist gemeine,
/ wan si allenthalben wil. / si ist niht ganz und hât niht zil⁹.

完璧なるものは一つでなければならない。ところが心変わりは、色々なことに同じように心を向ける。どの方面にも関わろうとするから。心変わりは完璧になれず終わりもない。

心変わりは少なくとも四つに分類される。好きと嫌い、諾と否である。心変わりは破壊されることもあるし、破壊することもある。というのは、心変わりに従う人は、いつか褒めざるを得なくなる相手でも貶すからである。彼にとって今日はどうしてもよい人だと思えても、明日はその人に名誉を授けることがあり得るからだ。だから後で十分に褒めることができなくなるほど、人を貶すことがあってはならぬ。というのは、今は実に取りに足りない人であっても、いつか立派な人になることがあるかもしれないので。

III. (1981 ～) 心変わりというものは、あらゆることに殆んど同じように関わる。しかし、それは君主達に最も似つかわしくない。なぜなら彼らの振る舞いは、どんなことに対しても決して揺らいではいけないのだから。君主たるものは、自分の言動に揺らぐことのない心をもつべきだ。嘘をつかずにおれないつまらぬ輩は恥辱にまみれる。さあ見よ！ 君主が嘘の道に踏み込むと、どのような守られ方をするのかを。その気があれば正義と真実を教えるべき人が、嘘のお手本をすっかり私達に見せる。というのは、そのような人は自ら真実を語ることがないからだ。嘘つきと呼ばれても心が痛まないほど喜んで嘘をつき、人々を騙したがるような極悪人はこの世にはいない。君主は自分のせいで家来の騎士が恥辱を被っているのかどうかと考えるときは、ここにお手本を求めるがよい。嘘が君主らに名誉を授け、騎士には沢山の恥辱をもたらすなら、それは奇妙な衣装だ。しかし実際には、騎士から名誉をすっかり奪い取るものが、君主に名誉を授けるということはあるまい。というのは、騎士にふさわしくないものは君主にとっても都合が悪いし、君主を飾るべきものは騎士にとっても飾りでなければならないからだ。さあこの話を聞いて心に留めなさい。嘘は騎士にふさわしくないのも、それは君主の名誉にも関わるのだということを。

(2015 ～) もし人の言葉とその心が一致しないのであれば、それはまことにゆゆしきことである。なぜなら、立派に聞こえるけれども邪な企みを秘めた話は、一つの例外もなく悪であるから。言葉は一つなのに語る心が表裏二つあると、悪はそれを立派なものだと思わせる。さあ心に留めよ！ 頭髪を不揃いに刈られると辛い思いをするのに、それが心と言葉なら、両者が一致しなくても私達は恥辱だとは思わない。虎刈りの頭髪なら恥辱だと思うのに。私達は心の中で喜びながら、心から出る言葉では苦しそうに演じる。これこそ大きな心変わりなのだ。

(2029 ～) 心成り代は嘘を生む母である。それはいかなる時も、真実に関係

することは無い。怒りと嘘とは、共に心変わりの子供なのだ。その子供たちには、さらに多くの兄弟姉妹がある。私はその者達を皆、この話を終えるまでに数え上げて説明しよう。しかし、それをさっと終えられなくても、あなた方の礼儀作法に免じて大目に見ていただきたい。多くのことを一度にさっと語り尽すことはできないのだから。誓って言えることだが、心変わりの一族のことを考えると、すべての親戚のなかで、嘘をつくことほど君主に対して許しがたいことは他にない。このことを真実として信じよ！ 嘘は絶対に許せない。嘘は一方の手には喜びを持つが、他方の手には心配と苦しみを持つ。一方の手は抱き締めるが、他方の手は殴打する。一方は愛するが、他方は憎む。一方は愛撫するが、他方は髪を引き抜く。一方は与えるが、他方は売り捌く。一方は皮を剥ぐが、他方は服を着せる。一方は褒めるが、他方は真っ赤な嘘だと貶す。そして両者はしばしば髪の手組み合いになる。長口舌であなた方をうんざりさせてはいけないので、このあたりで話を手短かにしよう。偽りの約束はいかにも素晴らしく見えるが、実は欺きの心にその根を張っているのだ。嘘つきは美辞麗句を並べ素晴らしい約束をするのに、その報い方は酷いものだ。君主たる者は、礼儀作法の鉄を用いて心を平らに切り揃え、不要な話を切り捨てるべきだ。心もそこから出た言葉も立派なものにするために。

(2065 ～) シャツが上着から一尺ほどはみ出している人は馬鹿だと思われる。上着の前の方が長く垂れ、後ろのすそが膝の高さまで垂れ下がっている人も、賢者は愚か者と見なす。それゆえ私は、立派な君主らにふさわしい助言を差し上げよう。君主らのシャツは上着と同じ丈にするべきだという助言を。つまり私が言いたいのは、君主らは施しを約束通りにたくさんしなさいということだ。というのは、私にはずっと以前から分かっていることだが、施せる以上に約束する人は、自分の嘘を大きく広げることになるからだ。君主は慎重になれ。前方にも後方にも広く目を配るがよい。あなたが約束をして施しをすることに

なった場合、約束したものを持っていないのなら、恥ずかしく思って当然だ。上着が前の足元に届く人は、立っている後姿も見ることがよい。施しを約束した後で悔やむ人が、その約束に苦しんでもすでに手遅れだ。但し、その人が自分の気持ちを偽ろうとしなければの話だが。財貨の損害ならまだましだ。なぜなら、もしそれが気持ちや心の損害であれば、恥辱的な苦しみになるのだから。すると君主は次のように言いがちだ：「私はしばしば施す以上に約束をしなければならぬ。というのは、たくさん拒絶することは私の望むところではないのだから。」それに対して私は応える：「約束をすることによって借りをつくるくらいなら、その前に断る方がよい。そうすれば名誉はより大きく、受ける憎しみはより小さくて済む。約束した後で断っても、うまくいくものではない。約束した後で施すのを拒む君主は、心に罪悪感を留めることなく、約束を与えた相手に大きな損害を与える人だ。というのは、約束を取りつけた人は、君主をすっかり当てにしているから。多かれ少なかれ何らかの施しを約束しようとする君主は、約束したものをすっかり奪い去ることになるということを、本当にしっかりと考えるべきである。高利貸しが貸すものも君主が約束するものも、確かに償われ実行されなければならぬ。人は高利貸しから質物を請け出す義務がある。君主もまた自分の誠意を請け出さねばならぬ。義務を果たせば、約束に苦しみが伴うことはないから。私は期日が到来する前に担保を請け出す。君主も真実の心を早く請け出そうと、強い意志を持つべきだ。そのような振る舞いをするのが君主には実に似つかわしい。

ich lœs mînn brief zem wuocherære, / daz er dermit mich niht beswære:

/ der herr sol lœsen sîn wort, / wan liegen ist der helle port. / swaz ein herre spricht iâ ode niht, / daz sol gar sîn schephen schrift¹⁰.

私は高利貸しに苦しめられないように、担保を請け出して証文を

反故にする。それと同様に君主も、取られた言質を請け出すべきだ。なぜなら、嘘は地獄に堕ちる門であるから。君主が施しをするに諾と言うか否と言うかは、高利貸しに証文を書くか書かないかというのと全く同じであると考えよ。

IV. (2125 ～) 私は次のようなことを言うので、君主たちの怒りをかっている：揺るぎなき心は、君主らの意志からも責任感からもすっかり消え失せていると。だから私の話すことが、君主らの寵愛に背かないように務めよう。善意に基づいて話しているのだから。もし私の主君が移り気な心を持っているなら、主君につき従って私も、心変わりする覚悟を決めなければならぬ。わが主君が明日ここから出て行くつもりはないと今日言っても、今夜に別の気持ちが起こり、明日はどこか他所へ行くのが良いと後で主君が思うなら、私も後でそこへ出て行かねばならぬ。今ではもうとくに私は教えを学びとった。船頭が舵を向ける方向に船は進まざるを得ないという教えを。君主が心変わりをするなら、臣民たちの心も揺らいで当然。しばしば明らかになったことだが、心変わりをする君主らの心は、この世で多くのものを移り気にしている。こうして世の中も全く私達の心変わりに倣って多様に、すなわち不誠実で移り気になった。こうなったのは私達の悪辣な振る舞いのせいだ。かつてこの世は全く揺るぎなきものとして創られたのに、今ではそれは揺るぎなき心と関わりがない。そのような悲しい状況を、見ようと思えば誰でも見ることができる。この世の心変わりの例は枚挙に暇がない。夏に私達は激しい雷雨に苦しむが、冬には氷と雪に苦しむ。今日は雨かと思えば明日は風。雨も風も私達にしばしば損害を与える。ピカッと光る稲妻の後に轟く落雷は、しばしば暗黒の死をもたらす。私の眼に映るところでは、夏の季節に向かっているのに、ひじょうにしばしば雪が降ったり、じきに霜が降りる季節なのに、猛暑になることもひじょうにしばしば起

こる。天氣に恵まれると思っても、報酬として雲をもらったりすることもしばしばだ。この世には移り気の習性が見て取れるが、それとて私達の心変わりにつき従っているだけだ。

(2169 ～) 私は敢えて確言しよう。もし私達に心変わりが無いとするなら、この世に起こっている移り気は決して起こり得ないであろう。それにしても、雨や風は何のためにあるのか。もしアダムとその子孫らが揺るぎなき心を持っていたとするなら、どうして雪が降るようなことが起ころうか。私達が寒さに苦しむことなど決して起こらないであろう。

(2177 ～) 私は次のように話した。最初にこの世が創られたとき、それはとても揺るぎなきものとして創られた。そのことは、いつも変わることなく夜が昼の前にやって来るという点に明らかだ。事実、冬の後でなければ夏が暑くなることはない。もし私達に心変わりがなかったとするなら、この世はかつて揺るぎなきものとして創られたそのままに、今なお続いていることであろう。ところが私達には心変わりがあって、それがこの世に沢山の移り気を与えている。それはまた私達の心変わりを苦しみに変えていく。というのは、この世の移り気がこの世自身に損害を与えるのではなく、損害はすっかり私達の身に降りそそぐからだ。この世がいつも移り気をもって変転する場合、私達にもたらずものは健康ではなく病である。

(2193 ～) 幸いなことにこの世はまだ揺るがぬ心の一部を残しており、このことが私達の幸せにつながっている。私達には揺るがぬ心が一つも残っていないので、この世のことは不思議である。いかなるものにも相応しい時期というものがあるが、それはこの世の不変性に基づいている。たとえば花や葉、果実や草は、旬というべき決まった時期に生い育った。果実は次々に実をつける。早く実をつけるものもあれば、遅いものもある。時期が去れば、それまで緑色であった木の葉は落ち草は倒れ、ともに枯れ朽ちていく。夏は昼が長いけれど、

冬にはそのようなことはありえない。夏は暑さが激しく、冬は寒さを一度も厭うことがなかった。

aver wir behalten deheine zît: / swaz in unserem muote lît, / ez sî übel
od ez sî guot, / wir wellen volgen unserm muot. / **ern aht ûf deheinn heiligen tac,** / swer sîn gelust verenden mac¹¹.

しかし私達人間は、定まった時期を持たない。心の中にあるものが良かれ悪しかれ、私達は自分の心に従おうとする。たとえば欲望を完全に断ち切ることのできる聖職者でさえ、禁欲日を守れないのだ。

(2215 ～) この世は昼間に太陽が地上を照らし、夜には地下を照らすという不変性を心得ている。そのことを不思議なことだと思っではならぬ。なぜなら、太陽は天と歩調を合わせて運行し、いつも元にもどるというのが太陽の本性であり習性であるからだ。そのことは書物に次のように記されている：「というのは、天が地球の周りをまわっているということが、かつてこの世の不変性であったからだ。」七つの星の軌道が作用するおかげで、弱い地球は天の強さに対抗して生き永らえており、その結果天が地球を回転させるということは起こらない。七つの星のいずれも自らが回る軌道をもっており、その円環軌道から逸れることはない。もっとも私達人間は、しばしば自分の軌道から逸れていくのだが。というのは、私達は行ったり来たりして、一つならず幾つもの道を求めるのだが、それでいて自分の悪行のためにどの道にも心が定まらないからだ。人は多くの道を求めるが、最善の道に従おうとはしない。私達には邪な道が善い道に、不正な道が真っ直ぐ正しい道に思える。そのため悪の道に従う。するとついに悪の道は私達を、すっかり恥辱を被ったり死にそうになったりする所

へ連れて行く、あるいは大きな苦しみを担ったまま戻ってくる所へ私達を連れて行く。なぜなら、遠く離れて行こうとする人は、結局多くの苦しみを抱いて帰郷するからだ。このことで私が言おうとしているのは、人が罪を犯した後で行うべき贖罪のことである。

(2249 ～) この世には、常に不変性というものがある。太陽が月に近づくと、月は小さくなっていく。その後でまた月は全体が大きくなり、太陽から遠く離れていけばいくほど、月はそれだけ一層大きくなって元の大きさにもどる。片や私達人間は、犯した罪のために課せられる罰が消えるときほど、良くなることは他にない。それゆえドイツ人はこれを譬えて言う：「病人が回復すると、以前と同じ健康体にもどった。」

(2261 ～) 太陽が昼間に照り輝くことは、これからもずっと不変でなければならない。太陽の光は昼間に、天の星の群れをすっかり隠す。太陽の光は私達に、昼間よりも夜にもっとよく星々を観させてくれるから。本当に最大のものは最小のものをすっかり奪い取る。しかし私達は、自分の身に招く不幸を隠してくれるこのような輝きを持っていない。これは嘆かわしいことだ。真実と言えるのだが、不正なことを人々の目の前で、白日のもとに悪意をもって行うのを、今の人は毫も恥じることがない。

V. (2277 ～) この世のどこかに棲息しているもの、這っているものや四足で歩いているもの、空を飛んでいるものや水中を泳いでいるものは、今なお変わることはない¹²。

und swaz ist niderhalbe des mân, / daz muoz vier elemente hân. / ich
mein die natûre vier / von den gemeinlichen wier / gemünzet sîn unde
geslagen. / der vier gevert wil ich iu sagen¹³.

月の下にいるものは、4つの元素をもっているに違いない。ここで私が言っているのは4つの本性のことで、それらによって私達は等しく刻印され打ち鍛えられている。それら4元素の在りようを説明しよう。

(2285 ～) 火・風・水・土という4元素は互いにせめぎ合っている。土は乾いており冷たい。水はその力の中に冷たさと湿りをもっている。風もまた熱く湿るのをやめることがない。それに対して火は風よりも熱く、乾いてもいる。さあ、愚かでない人は心を留めよ。これら4つの本性は、私達の肉体では統一がとれているのに、心では統一がとれていない。このことは、4元素の大きな敵対心から生じている。水と土の間には何も障壁がないし、風もまた自分と水の間に何も隔てるものを求めない。上方の風のそばには火がある。火は常に高く上昇していくものであって、下方に降りてこない方がよい。そのことは火が軽いことから起こっていることを、覚えておきなさい。4元素は互いにせめぎ合うけれども、それらがお互いに共存している様子を見よ。思うにこれら4元素は、互いを縛ることのできるバンドのようなものを備えているようだ。4元素は夜でも昼でも、バラバラに切り離されることはない。土はどんなに乾いても、水を乾かそうと望むことはしない。水には風を冷やすほどの力はない。風は湿らせるが、火にはそれができない。4元素の本性は、それぞれが決して別のものにならないからだ。確かに人は、そうしようと思えば水をうんと熱くすることも、火を消すこともできる。しかし火は、本性としてもっている熱と乾きを捨てることはできない。火が消えない限り、どのようにしても火からその本性を奪い去ることはできない。沸き立つお湯だって、水の本性から生ずる冷たさと湿りを捨てることはしない。その際、次のことに留意せよ。体がどんなに熱かろうと、人は熱いお湯で体を冷やせる。また私は次のことも知っているの

で言っておこう。風も土も、その本性から一日たりとて離れることはできないのだ。それなのに人は自分の本性から、いつもどうしてそんなに遠く離れてしまうのか。私達が本性からすぐに離れるのは、持てる体力以上に食べたり飲んだりして、いつも本性を越えてしまうからだ。自らの本性に従おうとする人は、身の程過ぎたことをするべきではない。獣は空いているお腹が一杯になると、たらふく食べることなどどうでもよくなる。獣はまた、喉が渇かないのに飲むことはしない。私達が持てる力以上に何をしようとも、それは全く本性から外れているということを、真実として覚えておきなさい。

(2349～) 私は次のように話した。4つの元素は月の下方に在り、月の傍ですっかり消え失せると。4つめの本性はそこで終わり、それより上方では5つめの本性がすぐに始まる。

der himel und die sterne siben / sint an der vümfthn natüre beliben. / die
andern sterne haftent al / andem himelischen sal, / ave dise siben haftent
niht: / dâ von ze hangen in gaschiht¹⁴.

天と7つの星は、この5つめの本性を保持している。その他の星々はすべて天の広間に接しているが、例の7つの星はそこにくっついておらず、ぶら下がった状態にある。

7つの星のうち最初のものは、高い位置にぶら下がっており、最後の星は下方の第4元素の傍にある。第1の星は土星（Sâturnus）と呼ばれ、その星には冷たさと乾きが知られている。第2の星は木星（Jupiter）と呼ばれ、熱くて湿っている。第3の星は火星（Mars）で、これは常に熱くて乾いている。第4の星は太陽（sunne）で、その陽光は熱くて乾いている。第5の星は金星（Vênus）と呼ばれ、その輝きは冷たく湿っている。第6の星は水星（Mercurîus）で、こ

れは熱く湿らせる作用をもつ。第7の星は月 (mân) と呼ばれ、それはしばしば冷たさと湿りを与える。このような作用はあらゆるものに十分に見られ、月はすべてのものを湿りで一杯にする。月が満ちてくると、あれこれの脈管もそのとき満ちる。

(2381 ~) ある星は自分の中から冷たさが生じる力を持っているがゆえに、「冷たい」と呼ばれる。しかし星そのものはどれも冷たくはない。星が「熱い、乾いている、湿っている」と言われるのは、月に近づく星の運行に応じて、風の「激しく乾いている、熱い、湿っている」状態を、その星がもっとしばしば惹き起こすからである。なぜなら私がすでに話したように、月の上方に在るものは特別に5つめの本性をもっているからだ。それゆえに、月と天の間にあるものが常に不変であることを、あなた方は不思議に思わないでいただきたい。そこに在る本性はただ一つ。それゆえその本性の在りようは、そこにあるすべてのものに共通でなければならぬ。相手と同じ本性を完全に備えているものは、その相手と同じように作用する。一方が何に苦しんでしようと、それを他方はもらいたがる。月の上方にはせめぎ合うものは何も無い。しかし月の下方に在るものには不変性が備わっていない。というのは、かの4元素がせめぎ合っているからだ。信じてほしい。だから月の下方には不変性が無いのだ。かの4元素のどれも、それが存続する限り自らの本性を捨てることはしないけれども、いつも姿を変えて自分を捨てている。というのは、風は毎日火になろうとし、同じように水は風に、土は水になろうとするからだ。そのような状況を惹き起こすのは、せめぎ合うそれらの本性である。熱さは冷たさに対してじっとしていることはないし、湿りが乾きに対していつ戦うことになろうと、いずれかに勝利の幸運が舞い込む。より強いのがどちらであれ、そのとき弱い方が退却して強い方に服従しなければならないから。このような戦いは日常茶飯事だ。だが月の上方は不変性が支配しているので、そこではせめぎ合いは無い。

VI. (2423 ～) 確かに渾然一体となるものは、当然ながら不変であるべきだ。だが私達は 3, 4 人集まると、決して一つにまとまることはない。ローマは心一つにしている間、名誉の大きな利益を得ていた。ローマがもはや一つになることがなくなって以来、その名誉はすっかり後退した。ローマが統一を保っていた頃、この世の多くのものを支配していた。しかし統一を失ってからは、その力もすっかり小さくなった。ローマの不安の種は至るところにあった、大洋のこちらにもあちらにも。今やローマの名誉は無に帰している。臆病で知られるビテルベ (Biterbe) の人々でさえも、ローマを怖れることはないのだ。

(2439 ～) ずっと昔にこの世で起こったことを、私はどうして話すのだろう。今の私達の時代でも、不統一、敵意、戦争、不運によって、多くの場所が灰塵に帰したのだ。ここ 30 年足らずの間のことでも、私は本当に考える。ベローナ (Berne) は最高の名誉をになっていたし、塔や家々は完璧なものであったが、今ではそれらはすっかり粉砕されて土にかえっている。プレスキ (Presse) も戦争や敵意のせいで、その価値を失うことになった。これは私達のこの時代に起こったことだ。ヴァンサンス (Vincence) やフェレーラ (Ferrære) についても、同じことが言えるであろう。

(2455 ～) これから私が話すことは小さな世界のことである。不誠実があまりに広く世の中に行き渡ったので、今では半日を費やしても、誠意と揺るぎなき心を誰も見出すことはできない。いま私達のこの時代に、揺るぎなき心はどこにあるのか。この世が選び取ったものは戦い、吝嗇、嘘、嘲り、憎悪、妬み、怒りである。徳操など今ではもうすっかり消え失せている。この世は心変わりになり満ち満ちている。今や誠意と真実はどこにあるというのか。人がコロコロと心を変えるところでは、どこにおいても揺るぎなき心はその価値を認められぬ。その心はイングランド (Engelant) から追い出され、カロリング (Kerlingen)

にも留まってはいない。なぜなら、両国の好戦的な王たちは、自分の国を戦争で荒廃させてしまったのだから。揺るぎなき心はプロヴァンス（Provenze）からも追い出された。異端によってそこで苦しめられたからだ。それではスペイン（Spange）にあるのだろうか。否である。なぜなら、揺るぎなき心を汚した異教徒や脱落キリスト教徒らが、スペインでそれを大いに苦しめるからだ。ピュレ（Pülle）にもその心は留まらなかった。とっくにそこから追い出されたので。それがローマ（Rôme）にあるとしたらどうだろう。ローマ人らの間違った助言に従って行動したことがある人なら、そこにも揺るぎなき心がないことは直ぐに分かる。トスカーナ（Tuskâne）でも、それを探すべきではない。巡礼者たちは、誠意がトスカーナに住み着いているかどうかよく知っている。彼らから離れてモント・フラスコーン（Mont Flaskôn）へ行けば、住みついていない様子が分かることだが。ロンバルド（Lamparten）にも誠意はない。なぜならミラノの市民達は、疑い・放火・戦争・略奪によって、誠意をひどく驚かしたのだから。ドイツの地にもそれが無いという事実は、遠方でも近くでもよく知られている。ハンガリー（Ungern）にも誠意はない。なぜならハンガリーには長い間、そんなものはあった試しがないからだ。ハンガリー人の不誠実と愚かさは、その王妃によく現れていた。

（2497～） 私は、もっと沢山の国名を挙げることはできようが、どの国にも誠意と真実は見出せない。そのようにしたのは心変わりのせいである。あなた方はその威力を確実に見ることができる。心変わりは私達に、この世は直ぐに滅びてしまうという大きな兆候を見せるのだ。私達皆が冷酷な心を持っていることで、この世が終わるということを私達は知ることができる。書物には確かに、この世が終わる前に飢饉・凶作・嵐・地震が起こると書いてある。今ではそれらがすべて、書かれている通りに起こっているのが見られる。戦争・敵意・怒り・妬み、国と国の対立・領土と領土の対立も、この世が終わる前に起こる

はずだ。

dar nâch kumt niht zehant / der werlde ende alsô drât. / die sint boten die
si vür lât: / untriu, lüge, meinit, unstæte / und aller hande missetæte.¹⁵

しかし、これらの現象が生じた後に、直ぐにこの世の終わりが到来するのではない。終わる前に、この世が送り出す先触れの使者がいるのだ。不誠実・嘘・偽証・心変わり・あらゆる種類の悪行がその使者だ。

私達のもとにそれらの使者が次々とやって来る。さあ、あなた方の心を神に對して揺るぎなきものとせよ。この世は直ぐに滅びるから、世の移り氣に従わずに神の御国へ昇って行けるように。あなた方は神の御国ではいつも変わることなく、あらゆる喜びを味わい苦しみを知らずに暮らせる。そこに在るのは変わることのない喜びである。第2章はこれで終わる。私のペンは第3章に向かう。

[注]

- 1 Thomasin von Zerklære に関しては、次の著書を参照。
Burghart Wachinger (hrsg.): Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon, Berlin, 1995 の Thomasin von Zerklære の項。
Karl Langosch (hrsg.): Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon, Berlin, 1953 の Thomasin von Zerklære の項。
- 2 Helmut de Boor/ Richard Newald (hrsg.): Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zur Gegenwart, 2. Bd., Die höfische Literatur 1170-1250 (hrsg. v. Helmut de Boor) München, 1953, S.402ff., 413ff.
- 3 Thomasin の代表的著作 Der Wälsche Gast 「異国の客」からの引用は、次のテキ

ストによる（以後、W.Gast と略す）。

Heinrich Rückert (hrsg.): Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria, Berlin, 1965.
更にテキスト解釈に際しては、次の研究書および辞書からも恩恵を受けた。

Ernst Johann Friedrich Ruff: Der Wälsche Gast des Thomsin von Zerklære, Untersuchungen zu Gehalt und Bedeutung einer mittelhochdeutschen Morallehre, Erlangen, 1982.

G. F. Benecke/ W. Müller/ F. Zarncke (hrsg.): Mittelhochdeutsches Wörterbuch, Leipzig, 1854.

Mthias Lexer (hrsg.): Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, Leipzig, 1872.

- 4 「第一の書」から「第十の書」までの大半は、筆者の下記の論考ですでに扱った。「第一の書」については、「13 世紀のイタリア人司教座聖堂参事会員が論すドイツ宮廷のミンネ観」（「ドイツ文学研究」報告第 49 号、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会 2004 年 3 月、39-67 頁）、「第二の書」については、この論考、「第四の書」については、「ドイツ中世の 'stae' な生き方——13 世紀のイタリア人聖職者 Thomasin von Zerklære によるドイツ人騎士への教訓」（「ドイツ文学研究」報告第 54 号、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会 2009 年 3 月、1-33 頁）、「第五の書」については、「中世ドイツの教育詩人トマジン・フォン・ツェルクレーレの『異国の客』に映し出された悪魔像」（「ドイツ文学研究」報告第 45 号、京都大学総合人間学部ドイツ語部会 2000 年 4 月、1-23 頁）、「第六の書」については、「ドイツ中世（12, 13 世紀）の tugen と untugen — Thomasin von Zerklære の Der Wälsche Gast に映るその諸相」（「ドイツ文学研究」報告第 55 号、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会 2010 年 3 月、1-35 頁）、「第七の書」については、「ドイツ中世のイタリア系教育詩人 Thomasin の学識」（「ドイツ文学研究」報告第 52 号、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会 2007 年 3 月、1-29 頁）、「第九の書」については、「ドイツ中世盛期の reht（法・正義）への信仰」（「ドイツ文学研究」報告第 53 号、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会、2008 年 3 月、1-24 頁）、「第十の書」については、「ドイツ中世におけるもっとも重要な徳操 milte」（「言語と文化の饗宴」仙葉・高岡・細谷共編、英宝社、2006 年 3 月、19-36 頁）において、詳しい説明を行なった。
- 5 stæte（揺るがぬ心）と unstæte（心変わり）は、特に「第二の書」で詳しく扱われるが、mâze（節度）と unmâze（節度の無さ）とともに、「第一の書」から「第八の書」に至るまで絶えず底流となっている。

- 6 「第二の書」は 1707 行から 2528 行まで。
- 7 W.Gast 1715-1718
- 8 W.Gast 1831-1836
- 9 W.Gast 1965-1968
- 10 W.Gast 2119-2124
- 11 W.Gast 2209-2214
- 12 Walther von der Vogelweide の[8, 28]の歌にも、「川を泳ぐ魚、這うもの、飛ぶもの、地上を歩くもの」という同じ四分類の表現がある。博物学者アルベルトゥス・マグヌスが、その著書「動物記」で四分類した、「水中に棲む動物」「地表を這う動物」「空を飛ぶ動物」「地上を歩く動物」に従っている。
- 13 W.Gast 2279-2284
- 14 W.Gast 2355-2360
- 15 W.Gast 2514-2518